

食べる楽しみを支援することによって認知症高齢者の終末期の尊厳を保てた一例

経口摂取の重要性を痛感して

○米林美由子

医療法人聖志会 渡辺病院

I、はじめに

近年、非認知症性高齢者だけでなく、認知症の人の終末期のあり方が注目されている。いわゆる医療行為だけでなく、臨床現場では、日々の食事をいかにするかの対応を迫られている。そもそも「口から食べる」ことは、人に生きる喜びや楽しみを与え、人間としての尊厳を保ち、QOLを高める。

今回、私たちは、家族に希望にそって100歳を超える認知症の人の看取りにおいて、最後まで経口摂取が行えた事例を経験することができたので若干の考察を加え報告する。

II、事例紹介

A氏、100歳台、女性、老年期認知症、HDS-R：0点。平成X-1年2月入院。入院時は、車椅子による移動が可能であったが1年後にはADLが低下し寝たきりの状態になった。さらに半年後には食欲が低下、脱水による発熱を繰り返して衰弱するも、輸液等により、発語が少しできるようになった。平成X年12月、医師の説明により家族も終末期と認識され、「好きなものをたべさせてやりたい」と願われた。

III、ケアの展開方法

以下の点に留意しながら摂食可能なものを調査して摂食してもらった。

- 1、家族から嗜好（味・形態）を聴取
- 2、厨房での味の工夫
- 3、厨房での形態の工夫
- 4、摂食・嚥下時の表情・状態の観察
- 5、親密なコミュニケーションの維持

IV、倫理的配慮 発表に当たり、対象者および家族に内容趣旨を説明し、了解を得た。

V、ケアの実際と経過

まず、少量なら嚥下できるのでとろみをつけた茶をごく少量口に含ませた。しかし、それを吐き出したため、甘みのあるアイスクリームをごく少量口に含ませると、口を動かすしづさが増えた。しかし、摂食量は不十分であるため輸液は平行して継続した。経口摂取を試みた品目はサイダー、アイスクリーム、プリン、お茶の寒天ゼリー、黒砂糖、ポカリスエットゼリーや家族が持参したたこ焼きであった。

A氏への輸液の継続については、苦痛のない範囲で可能な限りで行い、何らかの食べるという意思がみられる限り口から本人の好むものを提供していた。平成X+1年2月、一時的ではあるが「家に帰りたい」と発語することも可能になった。同年5月、A氏は亡くなる2日前まで、好きなものを極少量ではあったが食べることができた。家族は、「本人が最後まで食べられたことがよかった」と話されていた。

VI、考察

私たちは100歳を超える認知症の人の終末期を看取るにあたり、家族の希望にそって、最後まで摂食を支援することができ、その間、身体的に重篤な状態が一時的に軽快し、しっかりとした意思に基づく発語も確認できた。終末期のケアにおいて食べる楽しみを支援することは、意思表示が困難な認知症患者の尊厳をつことに繋がったのではないかと思われた。

